

『方丈記諺解』の注釈態度

1) 島内裕子

要旨

『方丈記』の成立は、建暦二年（一一二二）である。だが、『方丈記』の注釈研究が本格的に始まったのは、江戸時代の明暦期に入ってからである。山岡元隣による『首書方丈記』と大和田氣求の『方丈記訓説』が、明暦四年（一六五八）に刊行された。その後、『長明方丈記抄』（加藤磬斎、一六七四年）が刊行され、さらにその後、元禄七年（一六九四）に刊行されたのが、著者未詳の『方丈記諺解』である。

本稿では、先行する三種の注釈書と比較することによって、『方丈記諺解』の注釈態度を説明する。『方丈記諺解』は、語釈に関しては、ほとんど『首書方丈記』の説を取り込んでいるが、解説部分には、著者の思想や心情が書かれており、そこに『方丈記諺解』の特色が見られる。すなわち、『方丈記』の主題や、鴨長明の執筆意図の探究を目指すよりもむしろ、『方丈記』を通して、当代の人々に生き方の指針を提示する評論的な態度が見られるのである。また、『方丈記諺解』の解説文の表現は、俳句や俚諺を点綴し、語調は時に「七五調」になり、流れるようなリズムで文芸的な書き方となることもしばしばで、このような点にも、他の先行する注釈書との相違が見られる。

近世における古典注釈書の著者たちは、専門の学問的な背景を持つ、儒者・僧侶・和学者が中心であるが、『方丈記諺解』の解説スタイルに鑑みると、その著者像としては、文芸分野に属する人物像が浮かび上がってくる。

はじめに

本稿は、近世に出版された『方丈記諺解』（一六九四年）に焦点を当て、その

注釈態度を説明することを目指す。『方丈記諺解』は、著者未詳の注釈書である。なお、本稿では、架蔵本の外題であり、『国書総目録』で立項されている『方丈記諺解』という書名で記述する。

『方丈記』は、その末尾に建暦二年（一一二二）三月に摺筆したと書かれており、成立年が明らかでない、数少ない古典文学作品である。そのような『方丈記』の注釈研究が本格的に開始されるのは、明暦四年（一六五八）に、山岡元隣の『首書方丈記』が刊行されたからであり、四百年以上が経過した後だった。これに引き続いて、大和田氣求の『方丈記訓説』（一六五八年）、加藤磬斎の『方丈記抄』（一六七四年）、そして四番目の注釈書として、本稿の中心テーマである著者未詳の『方丈記諺解』（一六九四年）が出版された。その後、榎島昭武の『方丈記流水抄』（二七一九年）があるが、近世期を通じて『方丈記』の注釈書の出版は、上記の五種だけである。

本稿では、『方丈記諺解』以前に刊行された三種の注釈書と比較しながら、『方丈記諺解』の注釈態度を考察し、その過程で、著者の人物像についても推測したい。

一 近世における『方丈記』の注釈書

最初に、江戸時代における『方丈記』の注釈書の刊行を概観しておこう。

- ① 山岡元隣『首書方丈記』（明暦四年・一六五八年）
- ② 大和田氣求『方丈記訓説』（明暦四年・一六五八年）
- ③ 加藤磬斎『方丈記抄』（延宝二年・一六七四年）
- ④ 著者未詳『方丈記諺解』（元禄七年・一六九四年）

以上の四種が、十七世紀に刊行された『方丈記』の注釈書である。十七世紀の後半に入って間もない明暦期に、相次いで二種類の注釈書が刊行された後は、それぞれ二十年の間隔を置いて二種が刊行されただけに留まる。明暦期に二種類が刊行された背景には、おそらく「明暦の大火」があり、『方丈記』の冒頭近くに、「安元の大火」のことが写実的に書かれていることと、繋がりがあろう。「明暦の大火」という大災害が、『方丈記』への関心呼び起こし、ここに初めて、本格的な注釈書が出現したのである。

なお、先に挙げた四種の中で、山岡元隣・大和田気求・加藤磐斎の三人は、それぞれ『徒然草』の注釈書も著している。成立順に示せば、大和田気求の『徒然草古今抄』（万治元年・一六五八年）、加藤磐斎の『徒然草抄』（寛文元年・一六六一年）、山岡元隣の『増補鉄槌』（寛文九年・一六六九年）である。しかも、加藤磐斎には『枕草子』の詳細な注釈書もある。いわば、彼ら三人は和学者としての専門性が強い。それに対して『方丈記諺解』だけが、著者未詳である。ちなみに、『方丈記諺解』と類似する書名の、南部草寿著『徒然草諺解』は、寛文九年（一六六九）の刊行である。南部草寿はすでに一六八八年に没している。注釈態度から見ても、『方丈記諺解』の著者である可能性はないだろう。

以上が『方丈記諺解』に至るまでの注釈書の出版状況であるが、その後、二種の注釈書が書かれている。

⑤ 仁木宜春『方丈記宜春抄』（元禄九年・一六九六年）

ただしこれは、出版されずに、写本のまま伝わった。未刊行であるので、影響力という点で他の版本と同一視できない。

その後、近世最後の注釈書が刊行された。

⑥ 槇島昭武『方丈記流水抄』（享保四年・一七一九年）

こうして、最初の『首書方丈記』以来、六十余年の間に都合、六種の注釈書が著された。しかし、十八世紀初頭の『方丈記流水抄』以後、明治時代になるまで『方丈記』の新たな注釈書は、刊行されなかったのである。ただし、同様の現象は、『枕草子』の注釈書についても言えることで、延宝二年（一六七四）に、加藤磐斎『清少納言枕草子抄』と北村季吟『枕草子春曙抄』がほぼ同時に刊行され、その七年後に、岡西惟中の『枕草子旁註』（天和元年・一六八一年）が刊行されたが、明治時代になるまで空白期であった。磐斎と季吟の『枕草子』の注釈書は、どちらも大部で詳細なもので、この二種が同時に出現したことも不思議な暗合である。

『方丈記』の場合は、短編作品なので、語釈などの説明を、次々に詳細に増補

する余地がなかったのかもしれないが、近代以降の『方丈記』研究の活発化や、文学者たちによる関心の高さ¹⁾と比べると、いかにも注釈書の点数としては少ないように思われる。そのような中であって、四番目の『方丈記諺解』が、先行する三種の注釈書に対して、何を新たに付け加え、何を踏襲したかという点は、重要なことであると思う。

以下の論述は、まず、築瀬一雄編『方丈記諸注集成』（昭和四十四年、豊島書房）に収録されている先行する三種の注釈書を概観することから始めたい。

二 山岡元隣『首書方丈記』の概観

最初の注釈書である『首書方丈記』（明暦四年・一六五八年）は、著者を山岡元隣とする解説書もあるが、通説により、本稿でも著者は山岡元隣として論を進める。山岡元隣（一六三二〜七二）は、北村季吟の高弟の俳人であり、『宝蔵』（寛文十一年・一六七一年）のような俳文の先駆的な散文作品や仮名草子などの著作もある。また、『首書方丈記』よりも、十年以上も刊行は後になるが、『増補鉄槌』（一六六九年）の著者でもある。

『首書方丈記』（以下、『首書』と略称することもある。）は、「首書」すなわち、頭注形式の注釈書である。これ以後の注釈書の基盤となるような、行き届いた『方丈記』の注釈書である。なお、書名は『方丈記之抄』『鴨長明方丈記抄』などもあるが、本稿では注釈スタイルが明示される『首書方丈記』という名称を使用する。冒頭には、賀茂社の由来、『吾妻鑑』建暦元年十月の、長明と源実朝との会見記事、長明の『千載集』『新古今集』入集歌の抜粋や著作、方丈室の由来などの総論があり、末尾に明暦三年十一月とある。

注釈の特徴は、語釈中心で、出典や意味の解説などを、簡略に記述する。『方丈記』の最初の注釈書であるにもかかわらず、的確、詳細な注釈を付けることができたのは、元隣の学識もさることながら、当時すでに各種の『徒然草』の注釈書が刊行されていたこともかかわるのではないだろうか。時に、文意をわかりやすく解説することもある。注釈に使用している参考文献としては、さまざまな分野の書籍を用いており、特定の分野に力点を置いて注釈しているわけではないように感じられる。注釈箇所に出てくる書名を、順に重複を省いて挙げてゆくと、次のようになる。

『論語』『古今和歌集』『金剛経』『堀川百首』『白居易詩』『莊子』『仏書』『李白

詩序』『古今仮名序』『春秋』『拾芥抄』『阿房宮賦』『左伝』『和名抄』『平家物語』『奥義抄』『日本紀』『伊勢物語』『史記』『曲礼』『古語(往生要集)』『列子』『八識田中』『撰集抄』『琵琶行』『孟子』『拾遺集』『後撰集』『新古今集』『和漢朗詠集』『後撰集』『統古今集』『無名抄』『夫木集』『源氏物語』『帰去来辞』

このように、漢籍・仏書・和歌・歌論書と多彩だが、引用頻度が比較的多いのは、『論語』と『莊子』である。とは言え、これらの中で、特に中心となつていゝ分野はなく、さまざまな書籍から引用されている。したがって、これらの引用書目から、『首書方丈記』の注釈態度を概括するならば、『方丈記』の思想や鴨長明の主張に対して、特定の方向付けはしていないように思われる。頭注において、特に詳しく引用されているのは、「木の丸殿」の解説を『奥義抄』から引用した箇所、および、末尾近くで「ことにふれて執心なかれ」の解説を『金剛経』から引用している箇所である。

全体に簡潔・簡略な注釈であるが、『方丈記』の原文で、当時の一般読者が難解に感じるであろう箇所に、簡潔適切な注が付いている。『方丈記』の最初の注釈書として、有益なものと言えよう。そのことは、本稿の中心テーマである『方丈記諺解』が、その注釈のほとんどを『首書方丈記』に拠っていることにも繋がつたと思われる。このような『首書』の注釈態度に対して、次の『方丈記諺説』ではどうなるだろうか。

三 大和田気求『方丈記諺説』の概観

『方丈記諺説』(以下、『諺説』と略称することがある。)は、大和田気求(？)一六七二)による注釈書で、『首書』と同じく、明暦四年(一六五八)に刊行された。『諺説』にも冒頭に総論があり、方丈の庵室の先蹤として維摩詰の室に触れ、賀茂社の由来や長明の経歴などを記す。その中で『十訓抄』に長明に関する記述があることに言及したのは、新しい指摘である。また、源信の『三界義』にも触れて、『方丈記』の作意は、「大小三災を以て長明時代に合せ」「遁世の亀鑑を遺す」ことであると書いている。この視点は、加藤磐斎によつてさらに詳述されてゆく。注釈箇所に出てくる書名を、順に重複を省いて挙げてみよう。『首書』に出てきた書名もあるが、それ以外の書籍がかなりあり、博引傍証の印象を受ける。

『十訓抄』『真字本方丈記』『後撰集』『集韻』『大和物語』『維摩経』『法華経』『伊勢物語』『万葉集』『釈名』『字彙』『広韻』『蘭亭記』『源光行の和歌』『徒然草』『古今集』『白氏文集』『栄華物語』『周礼疾医註』『金剛経』『解脱上人の漢文』『礼記』『撰集抄』『曾祚好忠の歌』『漢書』『論語子罕篇』『素問』『言塵集』『百虎通』『枕草子』『拾芥抄』『職原抄』『呉融の詩』『源語類聚』『大智度論』『孟子』『韻会』『仏地論』『池亭記』『日本紀』『三界義』『莊子』『平家物語』『後伏見院の歌』『李約の詩』『奥義抄』『往生要集』『国語辰禽』『長恨歌』『統後撰集』『詞花集』『荀子』『六韜(兵法)』『洪範五行伝』『梁元纂要』『孝経』『左伝』『禁秘抄』『源氏物語・夕顔卷』『文選』『張文潜の詩』『論語』『出曜経』『列子』『毛詩大雅』『観無量寿経』『小学』『大毘盧遮那経』『素性法師の歌』『東鏡』『格物論』『神祇八代目』『元亨釈書』『西行の歌』『老子』『真宗皇帝勸学文』『韻学集』『陶淵明』『八雲御抄』『定家の歌』『春秋』『毘婆沙論』『式部大史広範の歌』『源氏物語・空蟬卷』『和泉式部の歌』『拾遺集』『祖庭事苑』『淮南子』『風俗通義』『唐書』『説文』『選子内親王の歌』『新勅撰集』『続千載集』『十王経(偽経)』『当麻中将姫山居十句』『同縁起の歌』『長明道の記』『琵琶行』『呂氏春秋』『釈氏要覧』『柳文の詩』『俊成・頼基の歌』『無名抄』『寂然法師の歌』『白居易詩・三五夜中』『信実の歌』『比山移文』『堀川院百首』『大進の歌』『玉葉集』『伝灯録』『源氏物語・桐壺卷』『花鳥余情』『北史』『維摩文殊問疾品』『詩経』『心学象見』『韓退之の詩序』『孟子』『詩経小雅』『詩学大成』『蘇子由の詩』『司馬法』『帰去来の辞』『仏説医経』『華嚴経』『大智度論』『浄名疏』『長明発心集』『四十二章経』『摩訶止観』『頭頼の歌』『因果経』『後京極・慈鎮の歌』『文選・東京賦』

以上が、『諺説』の主な引用書目である。『首書』と比べて、広範囲な文献を参照して注釈が施されていることがわかる。漢籍・仏典・音韻学に関する書物が目立つことも特徴と言えよう。また、『平家物語』や『池亭記』との類似箇所の指摘が詳しいのも『諺説』の特徴である。

この他にも、『首書』には見られなかった注釈態度として、以下の三点が重要であろう。第一に、「真字本」「異本」に言及する注釈が目立つことである。これは『首書』では見られなかった。本文に対する関心の高さと見えようが、その他の引用書物で、中国や日本の字書類からの引用が多いことも繋がっているとと思われる。すなわち、言語への関心の強さが、その背景にあるのであろう。このことは、大和田気求が、『字集便覧』などを出版した京都の書肆であることや、古典・韻学に造詣が深い人物であることとの関わりがあろう。

第二に、「安元の大火」の注釈で、『枕草子』に書かれている近隣で起きた火事に伴う不安と心配に言及していることである。「都のたつみより火出来たり」という部分の本文の、「火出来りて」の頭注に「清少納言枕草子にちかきほどに火出来ぬといふされたかいとさはがし」が挙げられている。ただし、この本文は意味が通らない。この部分は、春曙抄本も三差本も「近き程に、火、出来ぬと言ふ。されど燃えは、付かざりける。」という「騒がしき物」の一節である。そもそも『方丈記』と『枕草子』の間には、関連性がほとんど見られないのだが、この箇所を挙げているのは、気求が、『枕草子』をも注意深く読んでいた証しとなる。ただし、大和田気求の場合、ここでもやはり、「火出来る」という言葉が、『方丈記』と『枕草子』の両方に出てくるという、言語的な関心からのことであると思われる⁴。

第三に『池亭記』の表現との類似性の指摘は、現代でも重要な視点となっている。むしろ、『方丈記』と『池亭記』の関連性は、現代では研究の常識とさえ言えるくらいによく知られている。その出発点がこの『訓説』であり、この段階ですでに『池亭記』との深い関わりが比較検討され、表現においても、また、発想においても『方丈記』の重要な基盤となっていることが明示された。このことの意味は大きい。

四 加藤磐斎『方丈記抄』の概観

『方丈記抄』は、加藤磐斎による『方丈記』の注釈書で、延宝二年(一六七四)の刊行である。『首書』と『訓説』が相次いで刊行された明暦期以後、二十年近い空白を置いて、ようやく三番目の『方丈記』の注釈書が刊行された。先行する二種類の注釈書との比較検討を中心に、『方丈記抄』を概観してみよう。

まず、注釈書のスタイルとして、先行する二種が、どちらも頭注形式であったのに対して、『方丈記抄』は、頭注を付けずに、本文を適宜区切りながら掲載し、その本文の直後に、語釈・文意の解説・評釈を書くというスタイルを取る。したがって、一目で、わかりやすく要点が読めるというよりも、順に、丁寧に読み進めていくことで、全体の作品像が明確になる仕組みと言えよう。

『方丈記抄』の注釈の特徴は、本文を逐語的に解説してゆく点にある。その際に、仏教思想による解説が詳しく、この注釈書自体が、あたかも仏書のようにある。すなわち、『方丈記』の主題を、「諸法は空なりとしらせんが為也」「身と家とに着すべきにあらずといふ心なり」「もの空なることはりをいへる故に、三

災の相をかりてかけると見えたり」などと述べている。また、表現法の解説が詳しく、「三週の説法」(『源氏物語』帚木巻・雨夜の品定めにも見られる、具体例を出して説く筆法)、「影略互見」(書いたものによって、省略したことも暗示する筆法)、「譬説(譬えによって理解させる方法)」「因縁説」「三災(小三災、刀兵災・疾疫災・飢饉災/大三災、火災・水災・風災)」などのキーワードによって解説・解説してゆく。

先に述べたように、『方丈記抄』は、前半の災害記の部分では、本文を細分化して区切りながら、語釈と解説を続けて書いている点が特徴である。つまり、本文を掲げた後に、少し小さな字で一字下げで書かれている部分は、一見すると、語釈と解説が連続しているの、ある特定の難語や地名や固有名詞の語釈部分を切り出しにくい、順に読んでゆくと、まるで、目の前で講師が、逐一、『方丈記』の全文講読の講義をしているかのような、臨場感がある。

たとえば、「安元の大火」について、「此の一段、因縁説に大小の三災のすがたを用いる。その一なり。これは火災をいへり」とある。ただし、このこと自体はすでに、『訓説』でも書かれていた。また、「安元の大火」の具体的な記述について、「かくのごとくこまかにするす事、記の文体なり」「事を記して論を書くこと、文の一体なり」などと、文章の表現に着目して文体の特徴を明らかにして解説する。また、「都のうち三分が一にをよべりとぞ」の部分では、「とぞとは、人伝に聞きたるよしなり。源氏物語にある筆法也」とも書いて、『源氏物語』の名前を出して、解説している。「治承の辻風」のことは、「此の一段、風災を思ひ寄せたり」とその主旨を簡潔に示し、「福原遷都」については、これを「刀兵災を思ひ寄せたり」とみえたり。段のおもてに軍の事はみえねども、源平の乱も、此の都うつりなどより事おこりたれば、則ち、「刀兵の如し」と書いているのが注目される。『方丈記』には、同時代の大きな出来事である源平争乱に一言も触れていないことから、そこに鴨長明のどのような意図が込められているか、論者によりさまざまに推測されている。その点についてわたくしは、長明は、「人と栖」に執筆基準を絞っている故に、源平争乱自体はその基準からはずれるという認識があったからであろうと推測しているが、『方丈記抄』のように解釈すれば、『方丈記』の中に源平争乱のことも入っていることになる。ちなみに、『訓説』ではこのような解釈はされていない。磐斎は「因縁説の三災」に逐一当て嵌めることによって、『方丈記』の前半に書かれている出来事を、歴史の流れの中で位置付けたことになろう。

「養和の飢饉」については、「此の一段は飢饉災と、疾病災とを、思ひ寄せてか

ける物なり。」とある。飢饉の惨状を、「五畿内の事をほまかにいひて、諸国もかくのごとしと、影略互見して言へり」とある。この部分のまとめとして、「されば政をする人の、根本たることをいまして、かくいへるにや。」とあることから見れば、『方丈記』には、政道論的な側面があると解釈しており、このような観点は、『首書』と『譚説』には見られないことであった。

「元暦の地震」については、「此の段は、水災の相に思ひ寄せたり。地動は水災にとる子細あり」「これまで大小三災みなおはりぬ」と書いている。「元暦の地震」を、水災と把握しているのは意外であるが、確かに『方丈記抄』の本文で地震の描写を抽出してみると、「山くづれて河をうづみ、海かたぶきて陸をひたせり。つちさけて水わきあがり、いはほわれて谷にまろび入る。渚こぐ舟はなみにただよひ、道行く駒は足のたちどをまとはせり。」とあつて、水との関わりで書かれている。現代においては、『方丈記』の前半の五つの災害は「五大災厄」という言葉で把握され、五つの大災害がリアルに描かれた「災害記」という認識が一般的であるように思うが、警斎は、仏教で言うところの「大小三災」をそれぞれに当て嵌めて解釈している。仏教的な解釈であるが、作品内部の構造を「大小三災」という統一的な観点から把握して、一定の説得力を持つ。

『方丈記抄』においては、『方丈記』の前半に書かれているいわゆる「五大災厄」は、自然災害が立て続けに五種類襲いかかったという感覚ではなく、あくまでも、仏教の教義に沿った現象として理解されているのである。すなわち、「安元の大火」が火災、「治承の辻風」が風災、「福原遷都」は刀兵災、「養和の飢饉」が飢饉災と疾病災、そして「元暦の地震」が水災であるとすれば、仏教の大小三災・小三災に当て嵌めた解釈が完成する。けれども、鴨長明が『方丈記』の前半に、自分が体験した三十年も前の五つの大災害を、その被害状況に力点を置いて、具体的な数字を多用しながら写実的に書き綴った時、長明自身の脳裏に、大三災・小三災という仏教概念が明確にあったわけではないだろう。加藤警斎が、この概念を適用して、『方丈記』の前半の記述を解釈し、把握したということである。

なお、警斎が、「元暦の地震」の部分で、「武士のひとり子の事をいへるは、親子の哀れをいひて、人は子といふ物もつまじき教をいへるなるべし」と述べているのは、「大福光寺本」には欠落している場面、すなわち、武士の子どもが壁の下敷きになって亡くなり、親が声をあげて泣き悲しんだ場面を指しており、『方丈記抄』の本文が、江戸時代の『方丈記』の流布本によることがわかる。そして、その場面への評論として、子どもを持たない生き方をよしとしているのは、

おそらく『徒然草』の第六段の「我が身のやんごとなからんにも、まして数ならざらんにも、子といふ物、無くて有りなん。」という兼好の考えを反映しているのだろう。このようなところに『徒然草』の影響力が垣間見られる。

『方丈記抄』では、「元暦の地震」の後、「すなはち人みなあじなき事を述べて」から「玉ゆらも心をなぐさむべき」までの本文を、「此の一段、水火風・刀兵飢饉疾病あらぬ時も、世には住みがたき事を述べたり。世の中に住まんとすれば、いろいろの災難におそれ、災難のなき時も、かく有りて住みがたきといふ事を記したり」と述べて、此の箇所を第二段として独立させた段落構成の基準に言及している。

その後の「わが身、父方の祖母の家を伝えて」から「むなしく大原山の雲にくそばくの春秋をか経る」までを、『方丈抄』の最初から見ると第三段落としている。それは、この部分を、「世を背き家を出たる趣を書けり。」とするからであると、説明している。

『方丈記抄』では、その後の「ここに、六十の露きえがたにをよびて」から末尾までをまとめて一段として、「此の一段、山中の方丈の楽みをいへり。此の一段正文也。これをいはんとて、いろいろの事を述べたり」と概括している。この構成区分とその理由はかなり独自の視点であると思う。なぜならば、後半に関しては、前半と異なる注釈態度を取ることになり、このように一つの作品の注釈書の中で、注釈スタイルを変えるのは、珍しいと言つてよいだろう。

先ほど、『方丈記抄』は、本文を短く区切って注釈し、その注釈は語釈と、文脈の解説、その評釈からなっていることを紹介した。このようなスタイルの特徴は、その一区切りごとに解説や批評を書けることで、そこに頭注形式とは異なる注釈法があったわけであるが、後半では、本文を細分化せずに、ひとまとまりとして捉えているのである。ただし、今引用した、「此の一段、山中の方丈の楽みをいへり。此の一段正文也。これをいはんとて、いろいろの事を述べたり」という部分は、きわめて重要な警斎の作品批評となっている。つまり、「正文」とは、『説明・注釈などに対して文書の本文』（『日本国語大辞典』）の意であるから、警斎は、『方丈記』の前半とそれに続く部分、すなわち彼の区切り方によれば三段落までは、『説明・注釈』にあたる部分であり、その説明や注釈とは、すべてこれ以後の方丈の庵での閑居の楽しみを述べるためのものであるという『方丈記』に対する作品理解が示されているのである。

今回、『方丈記抄』の注釈態度を考察するにあたり、先行する三種の注釈書を精読したのだが、ここに至って『方丈記抄』の先取性に改めて気づかされた。

というのは、この加藤馨齋による『方丈記抄』は、仏教的な観点からの注釈が特徴であって、その点が枠組みとなっていて、文学としての『方丈記』を十分に把握し切れていない憾みを感じていたのだが、『方丈記』の後半に対する馨齋の評価は、芭蕉との繋がりをおぼろげに見落とすことの出来ない重要なものであった。その点について、略述して『方丈記抄』のまとめとしたい。

松尾芭蕉の『方丈記』への関心は、注釈者たちにも劣らぬ問題意識を持っていただと思う。そのことは、たとえば芭蕉の俳文『幻住庵記』における『池亭記』の表現摂取、『おくのほそ道』の冒頭文における李白の漢詩の摂取などが、『方丈記』の注釈書の摂取を暗示させるものだったからである。さらに付け加えれば、芭蕉が『方丈記』の全体像をどのように把握していたかを示すものとして、『幻住庵記』の推敲過程で、弟子の去来との間で交わされた書簡に触れておきたい。この書簡は元禄三年（一六九〇）八月に書かれた去来宛のものである。そこに芭蕉は、「長明方丈の記を讀に、方丈の事はんとて、新都の躁動・火事・地震の乱れ、皆是栖の上をいはむとなり」とあって、芭蕉は明らかに『方丈記』の主眼を後半部の閑居生活に求めた。その作品理解は、加藤馨齋の『方丈記抄』に書かれていたことと一致する。芭蕉がこの書簡を書いた時、すでに『方丈記抄』（一六七四年）は刊行されていたが、それを読んで芭蕉がこのような作品理解を書いたのかどうかは不明である。けれども、馨齋も芭蕉も、同様な主題把握していたことは重要であろう。さらに、『幻住庵記』末尾と『方丈記』末尾との類似性については、拙著『方丈記』と『徒然草』（二〇一八年、放送大学教育振興会）の第六章第二節でも述べた。

『方丈記抄』は、全体を四段に分けたことを、「一・二段は、身と住家とのほかなきことよりはりを述べたれば、理なり。三・四段は、住家のありさまを述べたれば、事也。」などとも書いている。『方丈記抄』は、『方丈記』の全体像を把握する姿勢が顕著であり、また、仏教思想によって、内容を把握する姿勢も強かった。けれども、長明が遂に獲得した理想の生活への共感をはっきりと読み取っている点に、従来言われてきたような仏教的解釈に力点を置く『方丈記抄』像とは少し違った一面を、今回、見出すことができたように思う。

以上で、『方丈記諺解』に先行する三種の注釈書の概観を終えて、次にこれらの考察を踏まえて、『方丈記諺解』の注釈態度を解明したい。

五 『方丈記諺解』の注釈態度

さて、本稿で、『方丈記諺解』（以下、『諺解』と略称することもある。）の注釈態度をテーマとしたのは、十七世紀に刊行された四種の『方丈記』の注釈書の中で、『諺解』は著者不明であることや、『日本古典文学大辞典』（岩波書店）に立項されていないことなど、他の先行する三種の古注と比べて、研究が進んでいなかったからである。この研究を思い立った後、幸運にも、『方丈記諺解』二巻二冊を入手することもできた。

まず最初に『諺解』の概略を述べよう。『諺解』については、築瀬一雄編『方丈記諸注集成』に、解題と翻刻が収録されており、適宜参照して有益であるが、本稿で『諺解』を考察するにあたっては、架蔵の『方丈記諺解』（二巻二冊、元禄七年二月刊。内題は『鴨長明方丈記諺解』）を使用した。本稿に掲載した図版もすべて架蔵本である。なお、この注釈書には、複数の異なる書名がある。本稿で記述する際の書名は、架蔵本の外題であり、また、『国書総目録』に立項され、『方丈記諸注集成』の目次、および解題でも使用されている『方丈記諺解』に統一した。

架蔵『諺解』の書誌を記せば、次のようになる。架蔵本は半紙本で袋綴二冊本である。縦二十二・三糎、横十六・二糎。表紙は無地の縹色で題簽はなく、直書で『方丈記諺解 上（下）』とある。

上巻は、見返しに「鴨御祖系図」が掲載されている。袋綴の折り目部分にあたる「柱」には、「方丈諺上 一」とあり、ここから「一」という丁付が入る。ただし、普通ならば一、二、三、四となるはずであるが、一の次の丁は、なぜか「一ノ二」、さらにその次に「四」、「五」とある。ここまでは、本文に入る前までの前付である。丁付でいうと二ノ三・四・五、丁数でいうと三丁にわたって、解說的な事項説明が書かれている。この解説は、「鴨・長明・方丈・記」の四項目の説明である。架蔵本には、序文が入っていないが、他の刊本では序文を持つものがある。

本文の丁付は前付から通しでつけられており、六丁から始まる。冒頭に内題は書かれていない。上巻の最終丁は三十九である。その巻尾には、「鴨長明方丈記諺解卷世間終」とある。【図版1】

「世間」すなわち、鴨長明の出家前の時代のことが書かれているという命名である。上巻の本文は「四大種の中に、水火風は常に害をなせど、大地に至りては

殊なる変をなさず。」までである。ただし『方丈記』を上下に分けるに際して、この部分で区切るのは、やや中途半端な気がする。ちなみに、先に考察した『方丈記抄』では、このあとのさらに一文、「むかし齊衡の比かとよ、大なるふりて、東大寺の仏のミぐし落などして、いみじき事ども侍りけれど、なをこのたびにハしかずとぞ」までが、第一段落である。その理由は「これまで大小三災ミなおはりぬ」という区分の基準によっている。それに対して、『諺解』では、「むかし齊衡の比かとよ」から下巻が始まる。

下巻の巻尾に「鴨長明方丈記諺解卷出世終」とある。【図版2】「出世」とは「出世間」のことで、「世俗を捨てて仏道に入ること。またその人。出家。僧侶。」(『広辞苑』)の意である。上巻が「世間」だったことと対応している。鴨長明の人生を出家を境として、前後に二分した捉え方である。現代でも『方丈記』の構造把握として、前半・後半に二分することが多いが、その際の前半は、「五大災厄」の記録として「災害記」と理解するのが一般的であり、この前半部を出家前の世俗時代として「世間」と捉える『諺解』の『方丈記』把握は、興味深い。

柱には、上巻と対応して「方丈諺下 四十」のように書かれている。丁数は四十から六十五である。刊記は次のようにある。

元禄七甲戌曆

仲春上旬

大坂呉服町深江屋

太郎兵衛板行⁸⁾

元禄七年の仲春、すなわち、一六九四年二月の刊行である。なお、「上旬」は「上旬」のことであろう。

『方丈記諺解』では、『方丈記』の本文は、大きな字で書かれ、本文の行間を利用して細かな字の傍注が付く。頭注は、付いていない。また、本文は、内容ごとに比較的短く区切られており、その区切りごとに解説を掲げている。挿絵は入っていない⁹⁾。

『諺解』の内容を順を追って紹介しながら、その注釈態度を明らかにしたい。まず見返しに掲載されている「鴨御祖社系図」は、『首書』『詞説』にはなく、『方丈記抄』には系図があるが、ここでは四十七名の名前が挙げられているのに対して、『諺解』では二十七名であり、簡略になっている。次の「鴨・長明・方丈・記」の四項目に関する事項解説は、先行三種の注釈書にも載るが、それぞれ

で多少の違いがある。その中で『諺解』が最も近いのは『首書』である。

本文に入ってから注釈スタイルを、図版によりながら紹介しよう。先にも触れたように、『諺解』は、『首書』や『詞説』のような頭注形式は採らない。本文を大きな字で掲載し、その右横に細字で傍注を入れる。また、表記は漢字・平仮名混じりであり、平仮名が多いが、その右横に漢字を宛てることが多いので、意味が取りやすい。また、簡略な説明は、その言葉から線を引いて、余白に書き入れている。このレイアウトは、現代人が見てもわかりやすく、また注の説明も簡潔なので、紙面がすっきりとしている。見開きの頁で説明するために、『方丈記』の第二文から第四文の途中までが書かれている上巻六丁の裏(六ウ)と七丁の表(七オ)を取り上げて説明したい。なお、濁点は適宜補った。「よどみにうかぶうたかたハ。かつきえかつむすびて。ひさしくとまる事なし」の傍注は、「よどみ」について、「淀水のたまりをいふ」とあり、「うかぶ」には「浮」の漢字を横に宛て、「うたかた」の所には、「泡の枕言葉也」という説明が付く。「かつきえかつむすびて」は横に書かれた漢字を宛てれば、「且つ消え且つ結びて」であることがわかり、意味が取りやすくなる。「むすびて」と「ひさしく」の間に横線を入れて「其泡」とあるのは、ここにこの言葉を補って読めば、「消えたと思えばまた結んで、その泡は常に生起をくりかえしている」という意味がよく理解される。このような、レイアウトと簡潔明瞭な説明が、ほぼこのような紙面の密度で、全編にわたっているのが、先行する三種の注釈書と比べて、一般の読者にとっては、見やすいと同時に、必要十分な語釈が得られるのではないかとと思われる。しかも『諺解』の特徴として、本文をかなり細分化して区切っているのが、その本文の直後に、内容を補足説明したり、さらには、そこから敷衍して、同時代の読者の興味や関心を惹くような、多彩な評言を入れることが可能である。これは『諺解』の大きな特徴であり、単に古典の知識を得るための注釈書というよりも、当時の人々に対する啓蒙書としての性格が見られる。

今、例に取っている第二文は、ほんの二行ほどのごく短い一文を独立して区切っており、そこに細字で五行の解説文が付く。この解説文の書き方も、堅苦しい学問的なものではなく、むしろ流麗な文章で、和歌を織り交ぜながら、興味深く読ませる工夫が凝らされているように思われる。解説文の冒頭は、「手に結ぶ。水に宿れる月影の。あだにはかなき。人間有為のありさまを。水の泡のきえやすふして。暫しもとどまらざるにたとへたり。」と書かれている。この文章が、原文を噛み砕き、なおかつ和歌と散文を融合したような、一種の雅文体で書かれていて、これ自体が文芸作品のような雰囲気漂わす。先行の注釈書には見られな

かった書き方である。その後には書かれている『金剛経』や『古今集』の例歌は、『首書』の頭注を踏襲していると思われるが、先行する注釈書を活用しつつも、独自の評言を入れている点が工夫であろう。【図版3】

もう一例、挙げてみよう。上巻十五丁ウから十六丁オの見開き頁を読んでみたい。本文の末尾しか出ていないが、この前の頁に出ている本文は「人のいとなみ、みな愚かなる中に、さしもあやうき、京中の家を作りて、宝を費し、心を悩すことは、すぐれ／＼てあぢきなく待るべき」と続く一文である。その原文に対して、次の様な解説文を書き始めるのである。「ふらふらと。瓢の垣になり次第。とかく浮世は。かろくすみてこそ。物のさはりも。なげきも。すくなからめ。かしこ顔に。たくみなせる業は。何事も。土仏の水なぶり。時有りて。かならず滅す」この文章の書き出しは、教訓的な道歌、あるいはユーモラスな狂歌のようなリズムカルな評言で、読者は興味深く読み進めるであろう。また文中に「土仏の水なぶり」という、あまり聞き慣れない言葉が出てくるが、この言葉は、「土仏の水遊び」とも言われて、「無知で、危険が身に迫っているの知らないこと、また、自分で災いを招いて自滅することのたとえ」(『広辞苑』)と言う意味であるが、注釈書としては、かなり砕けた解説文ではないだろうか。とは言え、この解説文の末尾では、世間の人々の、「不実の中に。すぐれて不実なる。営を。長明ふかくなげきて此方丈の記を。世にあらはすならんかし」と、鴨長明の執筆意図を推測しており、『諺解』の著者の当代の読者を意識した注釈態度がうかがわれるように思う。【図版4】

さらに、『諺解』の特徴として、『徒然草』のことを持ち出すことも多い。そのこととも相俟って、中世の時代に書かれた人生評論として、『方丈記』と『徒然草』を捉え、それらによって、当時の人々の人生に対する向き合い方を、ユーモアにくるみつつも、根底には真摯な思いをもって書き著したのが、『方丈記諺解』であった。

このような点を考慮に入れると、『諺解』の著者像は、具体的な人物名は思い浮かばないのであるが、人間や世の中に対して心を開いた、文章力もある教養人ではないだろうか。

おわりに

『方丈記』の古注を取り上げて、それらを比較検討することによって、『方丈記』がどのように読まれてきたかを概観してきた。それらのことを通して、注釈

とは何か、注釈とは何を目指して行われるべきか、さらには、注釈書自体の影響力についても、言及できたと思う。

『方丈記』の最初の注釈書である山岡元隣の『首書方丈記』においては、頭注形式により、主な語釈が示された。その中で、特に重要な注として、『仮の宿り』に関する李白の詩序があった。「百代の過客」は、芭蕉の『おくのほそ道』の冒頭部とも響き合い、芭蕉が『首書』によって『方丈記』を読んだ可能性を暗示する。

二番目の大和田氣求による『方丈記訓説』は、『方丈記』の背景に、平安時代の漢文『池亭記』があることを、表現の類似性によって、明示した。『訓説』も『首書』同様の頭注形式の注釈書であるが、頭注欄のスペースが、本文スペースよりも大きく取ってあることにより、『首書』と比べて、格段に詳しい注釈が可能となり、そのことは、注釈内容の詳述化とともに、引用書目の拡大を可能とした。

三番目の加藤馨齋による『方丈記抄』は、頭注形式を採らず、本文を区切りながら示し、それに続いて一字下げで語釈や文意・文脈の説明、さらにはその本文の全体に関わる評釈も述べるというスタイルであった。先行する二種の注釈書と比べて、本文の後に書かれる語釈や評釈は、注釈者の意を満たすまで長く書けるという特性があるので、全体的に、今までにない詳細な注釈書となった。ただし、このようなスタイルの注釈書は、専門的・学術的な様相を帯びることもあり、文学作品自体の内容を味読したい場合に、難解に感じることがある。なお、馨齋は『方丈記』の構成を独自の観点から四段落に区切り、その区切り方に対する説明も示しており、『方丈記』研究に新たな局面を切り開いたことが評価できよう。

このような注釈研究の展開のうえに『方丈記諺解』が登場した。『諺解』は、語釈などは、最初の注釈書である『首書方丈記』を大いに活用しつつ、頭注形式を採らずに、本文を短く区切ってその後には評論的な解説文を書くことによって、それまでの注釈書と比べて、格段に自由で伸びやかな、それ自体が随筆的な評論であるような、新たな注釈書の方向性を打ち出した。本文の細分化によって解説を書くという点では、『方丈記抄』と類似するが、加藤馨齋の注釈態度があくまでも学問的な熱意によって、広範詳細な解説となったのに対して、『諺解』はわかりやすく理解されるレイアウトによって、読者たちが解説文をみづからの日常生活と照らし合わせながら共感できる度合いも格段に大きくなった。

本稿で辿ってきた『方丈記』の注釈書の展開は、古典文学の注釈研究のあり方

や注釈書の生成プロセスのモデルケースとなるものではないだろうか。注釈書が蓄積することは、新たなスタイルのよりわかりやすく、より広範な読者に受け入れられる書物の出現を促す。その時、注釈研究の進展も意義あるものとなる。

今回は、わたくしにとつて『方丈記』の注釈書研究の第一歩であり、『諺解』に見る文芸的注釈態度の一端を考察したことにとどまった憾みがあるが、このことは、『方丈記』の注釈書においては、初めて現われた新しい注釈態度であることは明らかになったのではないかと思う。そのことに着目するならば、近代における文学者たちの古典論へと遠くつながる文学の回路も見えてくる。解釈の蓄積から新たに生まれてくる、「古典をどう読むか」「古典をどう論じるか」ということを、改めて考えさせるものとして、『方丈記諺解』の注釈的態度を位置づけた。

注

- (1) 島内裕子「堀田善衛『方丈記私記』の圏域」(放送大学研究年報)第二十六号、平成二十年) 参照。
- (2) 元隣の『首書方丈記』(二六五七年刊)は、『方丈記』の注釈書としては嚆矢だったが、それ以前に、『徒然草』の注釈書は、『徒然草寿命院抄』(秦宗巴、一六〇四年)、『野槿』(林羅山、一六二二年)、『鉄槿』(青木宗固、一六四八年)、『なぐさみ草』(松永貞徳、一六五二年、挿絵入り)が刊行されている。特に『寿命院抄』『野槿』『なぐさみ草』の「初期三天注釈書」が、すでに出版されていた時期であることに注目したい。すなわち、『徒然草』の注釈研究は、すでに蓄積があったのである。
- (3) 『国書人名辞典』第一巻「大和田気求」の項による。
- (4) 『方丈記』と『枕草子』の関連箇所はほとんどののだが、北村季吟の『枕草子』の注釈書である『春曙抄』では、「僧都の君の御乳母の」の段に、家が火事になって焼け出された男が、「日頃は、寄居虫の様に、人の家に、尻を差し入れてなむ、候ふ」と窮状を訴える場面があり、季吟はその箇所の注釈に、「長明方丈記に、寄居虫は、小さき貝をこのむといへる、是也」と書いて、『方丈記』と『枕草子』に共通する言葉が見られることに注意を喚起している。『枕草子』のこの場面が、火事の被害で寄

居虫のようなヤドカリ生活をしているというのは、『方丈記』の安元の大火と寄居虫という二つの言葉の連結によって、一見、共通性のないように思われる『方丈記』と『枕草子』の世界に、通底するものを見ており、参考になる注釈であると思う。ただし、『方丈記』に出てくる「寄居」の注で、『枕草子』の当該箇所と言及するものはほとんどなく、管見に入った限りでは、築瀬一雄『方丈記全注釈』のみであった。

(5) 萩原恭男校注『芭蕉書簡集』(岩波文庫、一九七六年)

(6) 『方丈記諺解』は、『国書総目録』によれば、別名に「鴨長明方丈記諺解」「長明方丈記諺解」がある。版本としては、元禄七年刊行のものだけである。

(7) 築瀬一雄編『方丈記諸注集成』に翻刻されている『方丈記諺解』には、冒頭に序があり、それに続いて、鴨御祖社系図、さらに「鴨・長明・方丈・記」の四項目に関する解説が付く。

(8) 築瀬一雄編『方丈記諸注集成』によれば、この刊年記は、諸版同一であるという。ただし、書店名が異なる版が各種あることが紹介されている。『国書総目録』で調べると、刊年が元禄七年版だけしか掲載されていないので、あまり広くは流布しなかつたかと思われたが、書店を変えて出版されていることから、築瀬氏も書いているように、『諺解』は「それだけ読者をかち得た」注釈書であったということである。

(9) 『首書方丈記』は、挿絵入りである。刊行年により挿絵の数や図柄が異なる。『方丈記諺解』も挿絵入りである。これらの挿絵の一部は、築瀬一雄『方丈記全注釈』(昭和四十六年、角川書店)に図版として掲載されており、参考になる。

(10) 本稿で、「図版3」「図版4」で示した以外にも、和歌的・俳句的な表現によって解説文を綴る箇所は多い。辻風の部分で、「青柳のなびくを風の姿哉」と書き、福原遷都の部分で、「住めばよし伯母捨山もわが家も丸うて白き有明の月の都に」と書き出す冒頭、出家を決意した長明の心を解説する冒頭で、「世のほだし捨てて厭はんかくれ里」という俳句めいた表現から始めることなど、独自の書き方である。

(二〇一七年十月二十五日受理)

The Method of *Hojoki-Genkai* as a Commentary

Yuko SHIMAUCHI

ABSTRACT

This paper focuses upon *Hojoki-Genkai* (方丈記諺解; published in 1694) for the purpose of elucidating its method as a commentary.

Hojoki-Genkai is a commentary on *Hojoki* (方丈記) by an unknown author. In this book, the text of *Hojoki* is written in large letters to which *Bochu* (傍注; notes between the lines of the text) written in small letters are attached. It has no *Tochu* (頭注; notes above the text). The text is divided into comparatively short passages, according to its contents, each division having its commentary. There is no illustration.

Although *Hojoki* was completed as early as in 1212, its study started late. Full-scaled commentaries began to be published after *Meireki* (明暦) period of the Edo era, the first of them being *Shusho-Hojoki* (首書方丈記) by Yamaoka Genrin (山岡元隣; 1658), which was followed by *Hojoki-Shisetsu* (方丈記訓説) by Owada Kikyū (大和田気求; 1658) and *Hojokisho* (方丈記抄) by Kato Bansai (加藤磐斎; 1674). *Hojoki-Genkai* was the fourth book of commentary on *Hojoki*.

This paper tries to elucidate its method as a commentary by comparing *Hojoki-Genkai* with its three predecessors.

As far as interpretation of words is concerned, *Hojoki-Genkai* owes much to *Shusho-Hojoki*, while its commentaries show the author's own views and feelings, which make up the characteristics of *Hojoki-Genkai*. The author seems to aim at criticizing the world's values or life-styles from the viewpoints expressed in *Hojoki* rather than studying the themes and the purpose of writing of *Hojoki*.

The commentaries in *Hojoki-Genkai* are interspersed by Haikus and proverbs. Sometimes they employ the rhythm of *Shichi-go-cho* (七五調) and their style often becomes fluent and lyrical.

Most of the commentators of classics in the modern period were professional scholars such as Confucianists, Buddhist priests and scholars of Japanese classics. But through the examination of the style of *Hojoki-Genkai*, we can get an image of its author as an different type of individual.